

交流会参加者のアンケートより

☆交流会に参加しての感想をお聞かせください。

- みなさんの温かい交流に感謝です。
- 久しぶりにみなさんの顔を見れてよかった。
- 楽しかったです。もう少し長く話したかった。
- とても楽しくおしゃべりができましたと思います。
- とても楽しかったです。時間があっという間に過ぎました。
- 要約の方、「陽ざしの会」の方、感謝で一杯です。
ありがとうございました。
- 話す時間が、席によって足りる所と足りないところがあったので、進行をはっきりと決めていただけると助かります。
- とても楽しかったです。準備が大変だったことでしょうか。ありがとうございました。



[大分西部公民館]

☆今回の改善点やご要望などお聞かせください。

- このやり方が楽しめて、おみやげもあってよかったです。
- また、よろしく願います。
- 元気で参加できることを祈っています。
- もう少しゆっくり、長く交流できたらいっぱい話せて良いかなと思う。
- 今回名札に使用したラベルですが、服に付かず困ってしまいました。首下げもしくはガムテープ等を使用したらどうかと思いました。
- スクリーンの要約の文字が見にくかったです。スクリーンにパソコン要約筆記の投影もあればいいなと思いました。



[班ごとのおしゃべり会]



[ビンゴゲーム・進行は三重野さん]

リーチの人は立って、次を待つ！



[ビンゴゲームの賞品・防災グッズ]

選ぶのも迷うのもお楽しみ

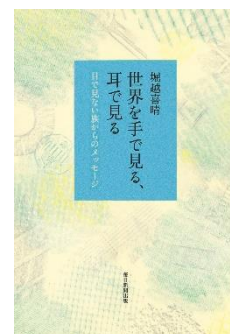


次回はクリスマス交流会を予定しています（12月に開催）お楽しみに！！

Jennyのブックレビュー [NO.3]

『世界を手で見る、耳で見る』

堀越喜晴 著 毎日新聞出版



著者は1957年新潟生まれ、言語学、キリスト教文学専門の大学の先生です。

幼い時に網膜芽細胞腫により両眼を摘出。NHK ラジオ「視覚障害者のみなさんへ」に出演。「点字毎日」にエッセイを連載しています。

著者は「目で見える族」「目で見えない族」という言葉を使います。小学校入学前に、姉の学芸会の図工の作品展で、「触っちゃダメ！」と言われとてもびっくりしました。

「なんで触りもしないのに見ることができるんだろう？」と不思議で、視力というものを超能力のテレパシーか念力のように感じたそうです。

私たちが、超能力がなくても平気で生きていられるように、著者も目で見えない生活はごく当たり前だといえます。そんな「目で見えない力」が私たちには逆に超能力みたいに見えるのです。

目で見える族から掛けられる言葉の、声の調子や文末の上げ下げ、息の吸い方、吐き方などによってその人の全人格が透けて見えてしまうそうです。

国連の障害者権利条約の中で重要なキーワードとされている「合理的配慮」という言葉に対する意見には「なるほど」と納得しました。

この言葉はもともと

「reasonable accommodation」を訳したものだそうです。「accommodation」の訳語として「配慮」を充てることの問題を論じています。

辞書を調べても「便宜、調整」としか出てこないのに、これを「配慮」と訳すことで、「配慮する側」と「配慮される側」との役割関係が出てきてしまうというのです。

確かにそうですね。「配慮」という言葉には、する側とされる側の立場の違いがあります。上下関係が見えてきます。

最後にどうしても紹介したい部分があります。著者の息子さんも両眼に腫瘍を帯びて生まれてきたそうです。右眼は摘出され、左眼は何とか視力をとどめました。

幼児期、近所の友だちと自転車を乗り回し、サッカーや野球に興じ、両親と一緒に信州の山々を踏破しました。

著者は「いつか、彼が自分の目が、ほかの子と違ってすることに気づく時がくるだろう」と考えていました。そしてついにその時がきたのです。

その時の父と子のやりとりは、涙なくして読めませんでした。残念ながら紙面が尽きました。是非、本を手にとって続きを読んでもいただきたいと思います。